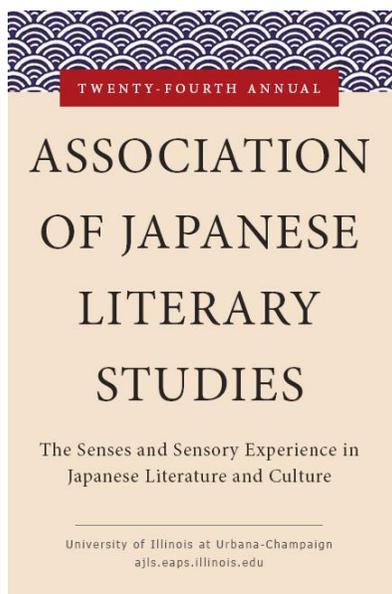


「視覚からの逃避と視覚への逃避：水村美苗『私小説 FROM LEFT TO RIGHT』における美苗の主体性構築」

“Escaping to and From Visibility: Minae’s Construction of Agency in Mizumura Minae’s *Shishōsetsu From Left to Right*”

Tajima Miho 但馬みほ 

Proceedings of the Association for Japanese Literary Studies 17 (2016): 82–91.



PAJLS 17:
The Senses and Sensory Experience in Japanese Literature and Culture.

Ed. Robert Tierney and Elizabeth Oyler

視覚からの逃避と視覚への逃避:
水村美苗『私小説 FROM LEFT TO RIGHT』
における美苗の主体性構築

ESCAPING TO AND FROM VISIBILITY: MINAE'S CONSTRUCTION OF
AGENCY IN MIZUMURA MINAE'S *SHISHŌSETSU FROM LEFT TO RIGHT*

城西国際大学大学院 人文科学研究科 博士後期課程
但馬みほ (TAJIMA, Miho)

キーワード

人種問題、主体性構築、視覚、英語覇権主義、私小説 race, construction of agency, visual perception, English hegemony, I-novel

要旨

水村美苗の自伝的小説『私小説 from left to right』における主人公美苗の主体性の構築に大きく影響する視覚の問題について考察したい。美苗の日本語の書き言葉偏愛は、美苗がアメリカに移住してのち抱くようになった人種の劣等感と表裏をなしている。『私小説』の中心テーマに、美苗が抱く＜白人＞に対する劣等感と、美苗自身に内面化された＜白人＞崇拜がある。作品全編にわたってアメリカの豊かさと日本の貧弱さが強調され、前者は光にみちあふれ、後者は黒い影として描かれる。いくら英語が堪能であってもそれを「正統的に継承することができない」という美苗の屈折した思いは、自分がアメリカ社会に同化できない「東洋人」であることに起因するのだが、それは話し言葉が必然的に話者を可視化するからである。美苗は書き言葉のかげに隠れることによって＜白人＞に強要された人種のカテゴリーから解放されようとするのである。美苗は視覚によって判断されることに強迫観念を抱くが、同時に日本語の＜文字＞という視覚表象に救いを求めている。視覚の作用が主人公の主体性構築にいかにか寄与するかを検証したい。

In this paper, I will analyze the problem of visibility that significantly affects the protagonist's construction of agency in Mizumura Minae's near-autobiographical novel *Shishōsetsu from left to right*, focusing specifically on the protagonist's visual paranoia that hinders her from constructing her agency through English.

The protagonist, Minae, expresses a strong sense of inferiority toward white Americans, while at the same time exposes her internalized white worship throughout the text. The novel presents race and language as an inextricably linked problem. Minae's obsession toward modern Japanese literature can be understood as her way to make up for her injured pride as well as a desperate attempt to construct her agency as a woman of color growing up in the United States.

本稿は水村美苗の自伝的小説『私小説 from left to right』¹を取り上げ、テキストにおける主人公兼語り手である美苗²の主体性の構築に大きく関与

¹ 水村美苗『私小説 from left to right』筑摩書房、2009年。

する視覚、とりわけ書記言語としての言葉と文体の問題について考察する。美苗の日本語の書記言語偏愛は、美苗がアメリカに渡ってのち抱くようになった人種的劣等感と表裏をなしていると考えられる。『私小説 from left to right』（以下『私小説』と略記）は1990年代に発表された当時、文芸作品としては珍しい横書きで、日本語、英語、フランス語を混交した大胆な文体が大きな反響を呼んだ。しかし語り手の抱く人種的劣等感と日本語の文字という視覚表象を結びつけて論じた先行研究は、管見では発表されていない。

『私小説』は1992年から1994年まで柄谷行人、浅田彰らが主宰する『批評空間』誌上に連載され、1995年に新潮社から単行本として、また2009年には加筆修正を施され筑摩書房から刊行された。1995年には野間文芸新人賞を受賞している。本発表では2009年のちくま文庫版を底本とする。

まず物語のあらすじを簡単に述べておこう。『私小説』は、主人公で語り手の美苗の視点で進行する。美苗は十二歳のとき、海外転勤を命じられた父親にともない、母親と二歳年上の姉・奈苗とともに両親の憧れの国アメリカに渡り、東部ニューヨーク州ロングアイランドに移り住む。物語世界は著者水村の実体験と同じく、1960年代中頃から1980年代にかけての二十年間という設定になっている。比較的恵まれた家庭出身の美苗は、日本では西洋風の生活をしており、まわりの日本人に優越感すら抱いていたが、ニューヨークの白人富裕層が居住する高級住宅地に移り住んではじめて人種的劣等感に直面する。それは英語の発話能力と密接に関係してもたらされた屈辱的な感情であった。それから徐々に美苗は英語から逃げるようにして日本語の書記言語の世界に閉じこもるのである。

二十年にわたるアメリカ生活の間に、家族の紐帯はほどけバラバラになる。父親は糖尿病の悪化と認知症の発症により寝たきりになる。母親は入院生活をおくる夫を見捨て、若い日本人男性のあとを追ってシンガポールに移住する。姉の奈苗は売れない芸術家としてニューヨークのソーホーでその日暮らし。妹の美苗は東部にある大学院の博士課程でフランス文学を専攻するが、口述試験を先延ばしにする万年大学院生で、古いアパートの部屋に引きこもっている。最終的に美苗は口述試験を受けたのちひとりで日本に帰国し、日本語で小説を書くことを決意するところで物語は幕を閉じる。

『私小説』の中心テーマのひとつに、美苗が抱く〈白人〉に対する劣等感と、美苗自身に内面化された〈白人〉への屈折した憧れがある。いくら英語が堪能であってもそれを「正統的に継承することができない」³という美苗の屈折した思いは、自分がアメリカ社会に同化できない〈東洋人〉であるとの思いに起因するのだが、それは音声言語が必然的に話者を可視化するためと考えられる。美苗は日本語の書記言語のかげに隠れることによって〈白

² 主人公・語り手の美苗と作者水村美苗を混同しないために、以降は主人公・語り手は美苗、作者は水村と表記する。

³ 366頁

人>に強要された<劣等人種>のカテゴリーから解放されようとするのである。アメリカ生活で常に立ち位置の確認を余儀なくされる美苗は、<白人>に対しては劣等感を抱きながらも、アジア人や黒人に対しては同一視されたくないというアンビヴァレントでコロニアルな心性を有している。ここで注意しておきたいのは、美苗が強い抵抗感を抱いている<白人>とは特定の人物を指すのではなく、<白人>という<想像の共同体>が<白人>以外の人々の上位に立つものと既定する近代イデオロギーの総体を示すことである。美苗は、通っている高校の黒人教師から同じ<有色人種>として括られることに強い反発を感じる。また日本以外の東アジア出身者に対しては、外観では日本人と区別がつかないという事実には許しがたい気持ちさえ抱く。その根源には、美苗が幼いころから内面化している<白人>崇拝の気持ちと、逆に人種イデオロギーで一方的にカテゴリー化されることへの反発があると考えられる。美苗は視覚によって価値判断されることに強迫観念を抱き、そこからの逃避をはかるのだが、その逃避先を日本語の<文字>という視覚表象に求める。一見矛盾した心理の背景には、人から強制される価値観に抵抗し、目に見えない世界を自分自身の価値判断によって具現化し、主体性を構築しようとする美苗の試みがあると思われる。その際美苗が依拠するのが書記言語としての日本語なのである。この点を本稿の前半で検証する。後半では日本語の文字表記の世界へ逃避した美苗が織り上げた『私小説』というテキストを言語表記の面から検証したい。結論からいえば、テキストに看取される豊富な言語資源や多彩な言語表記は、日本語以外では表現することが難しいと思われる重層的な効果を、視覚と情動の両面においてもたらすことに成功している。視覚の作用が美苗の主体性構築にいかに関与するか、そしてそれがどのようにテキスト上に表現され、いかなる効果をあげているかについて検証していきたい。

『私小説』ではテキスト全編にわたって<白人のアメリカ>の豊かさとしてそれ以外の貧弱さが視覚的に強調され、前者は白い光を放ち、後者は黒い影を落とすものとして描出される。特に目を引くのは写真である。『私小説』に挿入されたモノクロ写真の数々は、アメリカ東部の整然とした街並みを力強いコントラストで再現する。まばゆい光が街路樹に燦々と降りそそぐ。仰ぎ見るように写された石造りの堅牢な建物はその高さが強調され、数多の本を収蔵した図書館、屹立する塔がそびえる荘厳な大学キャンパスの写真などは、見る人を圧倒する知と権威、ゆるぎない秩序を象徴する。そのような写真のなかに突如として、中華街の写真が二葉挿入され、読者の目を驚かせる。一枚目は、大きさも産地もまちまちで、雑多な商品が所狭しと並べられた土産物屋のショーウィンドウ⁴。東アジア各国から寄せ集められた神像や人形は、観光客の目にはどの国由来のものだか判別がつかないだろう。埃臭いショーウィンドウの内部では、東洋がいっしょくたに扱われ陳列されている

⁴ 216頁

。もう一枚は、白菜や青梗菜などが並べられた八百屋の店先⁵。模造紙に手書きの漢字が氾濫する。売り物はひっくり返された空箱の上に乗せられ、脇には昔ながらの吊り秤が備えられている。撮影者の視線と同じ高さで撮られたこれら二葉の写真には、漢字と英語が混在し、混沌とした異質さを放っている⁶。もう一枚注目したい写真は、ちくま文庫版で新たに挿入された「ハイウェイから見える精神病院」というキャプションの付いた写真である⁷。先述のコントラストのはっきりとした写真の数々とは対照的に、ピントがぼやけ、全ての光を吸収してしまうような黒く薄気味悪い建物が印象的である。美苗の孤独で追い詰められた精神状態を表象していると考えられる。

美苗の主体性は音声言語、書記言語にかかわらず英語では構築できない。英語を話さざるを得ない状況をなんとか回避しようとするのも、英語の発話能力のみで知能をはかれる屈辱から逃れるためである。美苗は中学校では皆から「のけ者」⁸扱いにされている学習障害をもつ友人しかできない。彼女らは白人で英語を母語とするものの、言語能力が特に低く描かれている。友人の一人リンダは、ことあるごとに“Hey Minae, do you think I'm pretty? Do you think I'm sexy? Do you think I'm too fat? Do you think I'm crazy?”⁹と美苗に尋ね、常に自分の外見を気にしている。リンダはいもしない弟を溺死させたなどと異常な言動をとるようになり、病院に収監されてしまう。もう一人の友人ソフィーは、美苗によれば背が低く太っており、みみずくのような顔をしていると形容され¹⁰、その「醜さ」は「生まれつきの頭の悪さの象徴のようにしか見えなかった」¹¹とある。「言語を操る能力で過酷に階層化される」¹²アメリカ社会において、このような友達しかもつことができない美苗は「低能」¹³の烙印を押されたと感じ、「まことに格の低い人格となり果て」¹⁴自分の姿を恥じるのである。このように『私小説』では英語の発話能力と外見の美醜が相関するものとされている。英語に対する美苗のコンプレックスは言語能力が向上したのちも尾を引き、高校卒業後は「英語から逃れる為だけに」¹⁵美術学校への進学を決め、絵画（油絵）を専攻する。しかしこれにも途中で見切りをつけてしまう。

⁵ 218 頁

⁶ 216、218 頁

⁷ 424 頁

⁸ 196 頁

⁹ 同上

¹⁰ 201-202 頁。ソフィーの醜さは「不具」（203 頁）という差別的な言葉で表現されている。

¹¹ 203 頁

¹² 195 頁

¹³ 同上

¹⁴ 同上

¹⁵ 163 頁

美苗は英語が上達してもアメリカ社会には同化できない「隔たり」¹⁶があることを感じている。美苗の分身ともいえる姉の奈苗が、美苗とは対照的に「べらんめえ」¹⁷英語を乱用するのは、「タフな女という役柄を演じ」¹⁸、アメリカに適応しようとするための戦略といえるだろう。しかし美苗には奈苗の努力が報われるようには思えない。なぜなら英語がいくら流暢になっても、〈東洋人〉という人種までは変更できないからである。奈苗のまわりには常に淋しくみじめな黒い影が漂うように記されている。大学進学でみるみる英語が上達した奈苗は、「言葉が人間を創ってしまう」¹⁹とあるように、厚化粧をしてひんぱんに煙草を吸い、国籍不明の派手な服装を好み、母親から「色情狂」²⁰と言われるほど何人もの男と付き合うようになる。英語の発話能力の上達につれて奈苗の外見や行動までが変わっていくが、それでも奈苗は幸せそうには見え、美苗相手に辛い辛いとこぼすのである²¹。

『私小説』は美苗の英文による日記の記述ではじまるが、印象的なのは、物語の中ではじめて使われた日本語が「聞こえるわ、聞こえるわ」²²という美苗のつぶやきだということである。何が聞こえてくるかということ、日本のものとはまるで別様に聞こえる緊急車両のサイレンである。この「骨に凍みる凶まがしい音」²³は、あたかも異質な言語としての〈英語〉が美苗に警笛を鳴らして近づいてくるように受け取れる。美苗は日本のそれとはまったく異なるこの無機質な音に違和感をいだき、アパートの部屋に閉じこもってパソコンの画面に日記の文字を打ちつけるのである。本稿は感覚のなかでも視覚に特化して分析しているが、聴覚の問題も重要な意味を占めると考えられる²⁴。この点に関しては稿を改めて論じたい。

さて学校では「うすのろ教室」²⁵に入れられ無口な美苗だが、家に帰れば日本の文学全集を読み漁る知的な少女であった。美苗は「精神が日本語の世界に救いを求めており」²⁶、「漢字が私の精神の一部であり、また私自身

¹⁶ 117 頁

¹⁷ 26 頁

¹⁸ 同上

¹⁹ 325 頁

²⁰ 124 頁

²¹ 奈苗や美苗の母親の事例も含め、アメリカとの接触により日本人女性が過剰にセクシュアライズされることに関して、現在水村以外の作品も分析対象に含めて考察を進めている。稿を改めて論じたい。

²² 5 頁

²³ 6 頁

²⁴ 上述のサイレン以外でも、奈苗との電話の会話が美苗の意思決定に与える弁証法的な効果や、美苗の家に頻繁にかかってくる孤独な老婆からの間違い電話などのもたらす効果である。

²⁵ 339 頁。英語では“dumb class”とある。

²⁶ 129 頁

が漢字の精神の一部でもあるのを発見」²⁷する。「実際漢字を書きひらがなを書けば、私は知恵遅れの劣等人種といういささかみじめな存在から、他の言葉には置き換えられぬ世界を知った輝かしい存在へと転瞬のうちに変身するのであった」²⁸と書かれているが、ここでも「輝かしい存在」に「変身」という視覚表現が使われている。日本語の漢字やひらがなを読み、書くという行為が、美苗を別人に変身させる呪術として作用するのである。

ここであらためて文章を書くことによる美苗の主体性構築について考えたい。日本で子どもの頃からバレエやピアノの習い事をしてきた美苗だが、アメリカで人種の問題に直面してからは、どちらもやめてしまう。なぜだろう。思うに、バレエとピアノは演者の姿が観客にはっきり映る西洋由来の芸術である。テキスト中でピエール・ロティや芥川龍之介の『舞踏会』について言及していることからわかるように、美苗は日本人として、西洋の〈みっともない模倣者〉扱いされることに耐えられないのではないかと。ゆえに、作者の姿を晒すことなく作品の真価で評価される芸術、すなわち文筆に美苗は自己実現の可能性を託したのではないだろうか。またこんなことも考えられる。ピアノやバレエ、そして美苗が途中でやめてしまった油絵は、書記言語を介さない芸術である。美苗はそれら西洋至上的な意味での〈普遍的〉な心情に訴えかける芸術ではなく、あえて日本語という固有な言語を使用する創作芸術を選択することによって、西洋のいわゆる〈普遍性〉に抗う姿勢を表明していると考えられるのである。

さて後半では『私小説』のテキストを言語表記の面から検証したい。『私小説』は英語、若干のフランス語、日本語の三言語から構成される。発表当時、『私小説』の複数言語混交文体はセンセーショナルに取り扱われ話題を呼んだ。テキストに複数の言語が混交していることが何ゆえそれほど話題を呼んだのか、アメリカのマイノリティ文学を読み慣れた研究者には不思議に思われるほどの取り上げられようであった。

いっぽう言語学と文学両方を専門とする研究者は、異なった観点から『私小説』を論じている。青柳悦子は、『私小説』の特異性は多言語の混交というよりも、レベルの異なる言語、すなわち日常言語、書記言語、文学言語、内面言語が入り混じっているところにあると的確に論じている²⁹。また高木徹は、『私小説』での日本語と英語の混在は「アメリカでの「私」の言語生活が日本語と英語の両方から成り立っており、どちらも欠かすことのできないものであるからだろう」³⁰と言及するが、これも的を射た指摘といえる。多言語混交文体は多民族国家に暮らす人間にとってはごく日常的な営為で

²⁷ 337 頁

²⁸ 338 頁

²⁹ 青柳悦子「複数性と文学—移植型〈境界児〉リービ英雄と水村美苗に見る文学の渴望」『言語文化論集』56 (2001):18-19. <http://hdl.handle.net/2241/8880>.

³⁰ 高木徹「水村美苗『私小説 from left to right』を読む」『CUWC gazette』9 (1998): 5. <http://ci.nii.ac.jp/naid/110000486874>.

ある。水村自身はのちに『私小説』の多言語混交文体について、他のどんな言語にも翻訳できるが英語にだけは翻訳できないと述べ、『私小説』の英語への翻訳不可能性を強く意識する発言をしているが、英語を英語に訳すことの不可能性には異論がある。実際のところ現在ジュリエット・W・カーペンターと水村美苗の共同作業により『私小説』の英訳が進められているので、水村も当時とは違った考えをもつようになったと思われる。

さて、次に文体の違いによりもたらされる効果について言及したい。『私小説』では地の文には横書きが使われているが、一部縦書きと横書きが併用されている。またフォントも場面に応じて使い分けされている。そのほか口語文、擬古文、旧仮名遣い、写真の挿入、芥川龍之介や樋口一葉のテキストからの引用など、技巧をちりばめ、醸し出す雰囲気や意味に変化をもたせている。以下にそれぞれを簡単に分析する。

擬古文使用箇所は視覚を有効に使い、あたかもワルツの軌跡のごとく曲線的で、詩のような文章になっている。それは萩原恭二郎らモダニズム詩人の表記を思いおこさせる。いわゆる女手の部分は王朝文学の雅やかさを伝え、母から美苗への手紙の部分はフォントの工夫で手書きのやわらかな印象を表出している。美苗は「縦に大きく大らかに流れた漢字とひらがなは、横に蟻のようにぎっしりと並んだ alphabet とは全く異なった世界を目の前に喚起する」と挑戦的に語る³¹。

カタカナ表記に関しては、三つの例をあげたい。第一に「東京のミナトク」という奈苗の発話である。宝くじを当てて「東京のミナトクに広いマンションを買う」³²という奈苗の発言で、「ミナトク」がカタカナ書きになっている。これは奈苗が外国の都市と同程度にしか「港区」を知悉していないことを表していると考えられる。

二つ目は美苗が交際している日本人留学生「殿」のエピソードである。カフェでカプチーノ (cappuccino) を注文すると代わりに紅茶 (cup of tea)³³が出てきてしまうほど強い日本人アクセントを有する「殿」の発話は、「アイ・アム・ソーリー・マイ・イングリッシュ・イズ・ソー・プアー」³⁴と本人が自嘲気味に自認するように、カタカナで表記されている。対照的に美苗や奈苗の話す英語は、英語に習熟していなかった渡米直後以外はアルファベット表記になっている³⁵。日本人アクセントの強い「殿」の英語をカタカナ表記にすることにより、視覚方言のような効果を生みだしている。

³¹ 338 頁。このように多彩な表記を駆使し、それぞれ異なった印象を読者に喚起させるテキストをどのように外国語に翻訳するのか、翻訳者泣かせの文体といえる。

³² 28 頁

³³ 332 頁

³⁴ 82 頁

³⁵ 渡米直後の美苗の英語の発話がカタカナ書きになっている部分は 194 頁を参照。

三つ目に、カタカナが空々しい印象を与える例を紹介しよう。高校の休み時間に絵を描くことに熱中していた美苗は、英語教師から絵を描くことよりもまずは英語を勉強すべきなのではないか——“You know, you should be working on your English.”「君ハ英語ヲ勉強シテイルベキデショウ」³⁶と注意されてしまう。この発話のカタカナ表記に関して以下の二点が考えられる。ひとつには、英語教師の言葉に美苗が反発を覚え、言葉が美苗の心に外国語としてしか響いてこない様子。もうひとつには、言葉が美苗に命令を告げる法令のように空虚に響く様子が、カタカナで効果的に表されていると考えられよう。

次に、旧仮名遣いの効果について検証したい。「二世の奥さん」と呼ばれる人物が登場するが、日系二世である彼女の話す言葉は、以下のように英語をまじえた旧仮名遣いで表記されている——「catnip が入つてゐるんですよ、またたび、ほら猫にまたたび、お女郎に小判で云ひますでせう」³⁷。これは高木徹が論じるように、奥さんが「日本の変化から切り離されているだけに、かえって日本文化の古い部分を残している」³⁸ためだと考えられる。柳田國男の『蝸牛考』は日本の外に出ても有効だという証左である³⁹。

漢字が与える絶大な視覚効果についても一例をあげよう。マンハッタンのグランドセントラル駅周辺の様子を表わすのに、以下の漢字が列挙されている——「貧困殺人強盗強姦失業買春麻薬疫病孤独絶望」⁴⁰。一見して、あたりの禍々しい様子が即座に立ちあがる。

固有名詞が日本語と英語とでは同じものとして結びつかない様子も、表記の違いによって表現され得る。高木徹は『私小説』において人名や地名、植物の名前などの固有名詞が、あるときは英語表記、またあるときは日本語表記になっていることに注目し、その理由を、美苗がアメリカで習得した言葉はアルファベットで表記し、日本ですでに知っていた言葉はカタカナ書きになっていると推察する⁴¹。高木は「最初から英語として「私」の中に入ってきた言葉は英語でしか書き表せないということだろう」⁴²と論じている。筆者もおおむね高木と同意見であるが、植物の名前に関して若干補足をした。

テキスト内にロングアイランドの春の庭の描写があるが、そのなかで英語表記になっている植物は、maple tree, dogwood, azalea, alyssum の四種、日

³⁶ 365 頁

³⁷ 80 頁

³⁸ 高木 8 頁

³⁹ 実際筆者がアメリカ在住中お世話になったカリフォルニア州ワトソンヴィル (Watsonville) の日系二世の女性たちは、一九九〇年代に入ってもなお旧仮名遣いを使って私に手紙をくれていた。

⁴⁰ 269 頁

⁴¹ 例えばゲーリー・クーパーやヌレエフなど。

⁴² 高木 6 頁

本語表記になっているのは、鈴蘭、百合、八重桜、すみれ、クロッカス、ヒヤシンス、チューリップである⁴³。十二歳でアメリカに渡った美苗であるから *alyssum* や *dogwood* はアメリカで初めて目にしたのかもしれないが、*maple tree* や *azalea* は日本でも馴染みの植物のはずである。ではなぜ英語表記になっているのか。私見ではアメリカの *maple tree* や *azalea* は日本のカエデやツツジとは別種のもので美苗の目に映ったのだと考える。実際上記二種以外でも、紫陽花や菊などの植物が日米では花姿の印象が随分違い、筆者も驚いた覚えがある。そのような植物を『私小説』ではあえて英語表記にしたのだと思われる。ここでも視覚と言語の密接な関係がうかがわれ、著者の言語表記に対する細やかな配慮が看取できる。

最後に「白」と「光」という二つの言葉の表象について検証したい。テキスト全編にわたって白や光という言葉が効果的に使われていることは先述したが、白に関して特に重要な例をここでは一点あげたい。それまで「大した抵抗もなく」⁴⁴英語の“white”という言葉を使っていた美苗と奈苗の姉妹が、あるとき奈苗が発した日本語の「白人」、すなわち<白い人>という言葉で、それまであえて直視することを避けてきた複雑な感情をはっきり認識する象徴的な場面がある。

———あたしたち、白人じゃないじゃない。（略）

私はただぼんやりと奈苗の顔を見返していた。奈苗は今まで「白人」というような言葉を使うことはなかった。思えば私自身英語では *white* と大した抵抗もなく使っていたその言葉を、日本語で、しかも奈苗の前に使うことはなかったのである。それがあの日、二人の間には、白人白人白人と何か見えない禁が解かれたように白人という言葉が出てきた。それは逆に私たち姉妹が今までその言葉を避けて通ってきたのをあらためて気づかせたのもであった。⁴⁵

英語の“white”であれば深い意味をもたないのに、それが漢字の「白人」となると一転して美苗の心情にダイレクトに作用するのである。

光に関していえば、一般に光は<希望>や<真理>を象徴する。テキスト上に列記された「*lux, luce, licht, light, lumiere*」⁴⁶など西洋言語の「光」を意味する言葉は、<真実>という概念と結びつけられる。しかしこれらはすべて「1 (エル)」という表記ではじまる単語で、日本語には置き換えられない音だという点に注目したい。これらの単語で象徴される<真実>は、絶

⁴³ 55 頁

⁴⁴ 293 頁

⁴⁵ 294 - 5 頁

⁴⁶ 416 頁

対的・普遍的なものではなく、あたかも日本語には存在しない概念なのだとテキストが主張しているようである。

以上みてきたように、日本語の豊富な言語資源や言語表記、そしてそれらをさらに英語やフランス語と織り交ぜたことで、『私小説』のテキストには豊かな厚みをもたらされたといえよう。芥川や鴎外、三島の文体に関して美苗は、「昔からあった日本語を借りてきて新しい日本語の中に西洋の世界を現す技法」⁴⁷を駆使していると評しているが、『私小説』もそれに比する形で、テキストに日本と西洋を現出させることに成功している。日本語の特性を生かした柔軟なテキストだといえよう。美苗は英語では「知恵遅れの劣等人種」⁴⁸としての実感しか得られなくとも、『私小説』を書くことにより、日本語の書記言語という媒体を通せば、絢爛たる「輝かしい存在」⁴⁹となりえるのだとばかりに、自己の真価を表明しようとしているのだといえよう

先述のように現在『私小説』の英訳がジュリエット・W・カーペンターと水村美苗の共同作業で進められている。このように多種多様な表現を包み込む重層的な『私小説』のテキストが英語ではどのように再現・表象（represent）されるのか、完成を心待ちにしている。

⁴⁷ 326 頁

⁴⁸ 338 頁

⁴⁹ 同上